

「つたえること・つたわるもの」 №188

## 中国からきた漢字が、万葉仮名・国字(和製漢字) という日本語になった。

健康ジャーナリスト 原山建郎

先月、文教大学越谷校舎で行った教養講座『たのしい日本語——おもしろくことば』その1』の配布資料などを参考にしながら、「漢字→国字(和製漢字)」、「万葉仮名(借字)→ひらがな・カタカナ」について考えてみよう。

古代中国で「漢字」が生まれたのは、約3,300年前(紀元前約1,300年)、殷王朝のころに作られた甲骨文字(亀の腹甲や牛馬の肩甲骨に刻まれた文字)で、その後、金文(青銅器に刻まれた文字)、篆書(印鑑によく使われる書体)、隸書、草書、行書、そして現在最もよく使われている楷書へと発展(?)してきた。現在の中国では「簡体字」、台湾や香港では「繁体字(※漢字の旧字体)」が使われているが、日本では戦前までは旧字体、戦後は当用漢字・人名漢字が漢字として用いられている。

### ☆ 呉音、漢音、唐音で異なる発音

6世紀ごろ、仏教(漢訳の仏典)伝来と時期を前後して、日本にもたらされた中国の「漢字」は、それまで文字を持たなかった日本人の耳に、最初は「漢字熟語(中国語)」の音(発音)→「音読み」として認識された。

しかし、それは「漢字」が伝えられた年代によって、たとえば、「明」という一つの漢字は「ミョウ(呉音)・「メイ(漢音)・「ミン(唐音)」と、発音(読み方)が異なっている。

- ① 呉音は5~6世紀ごろ、呉の地方で使われていた字音で、奈良時代以前に日本に伝えら

れた。「人間」「平等」など、仏教関係や古くから生活に溶け込んでいる。

★頭痛(ずつう)、内地(ないち)、馬力(ばりき)、日曜(にちよう)、人間(にんげん) ← ※ちなみに、同じ漢字でも人間(じんかん=漢音)は「人の住んでいる世界。世間。世の中」を意味する。

- ② 漢音は7~8世紀ごろ、呉よりも北の地方で使われていた字音で、遣隋使・遣唐使や留学僧によって日本に伝えられた。各時代の政治的な普及の後押しもあり、音読みの中でいちばん数が多い。

★頭部(とうぶ)、境内(けいだい)、尽力(じんりょく)、終日(しゅうじつ)、人材(じんざい)

- ③ 唐音は10世紀以降の字音で、禅宗の僧や貿易商人によって日本に伝えられた。さまざまな地方の音が断片的に伝わったため、体系的ではない。

★饅頭(まんじゅう)、呼び鈴(よびりん)、金子(きんす)、布団(ふとん)

### ☆ 間違いやすい同音異義語

また、「同音異義語」は耳で聞くと同じ音なので、話題の文脈によって判断する。しかし、その熟語を正しく理解していないと、とんでもないことになる。『まちがしやすい同音語 使い方の読本』(小学館編、小学館、1999年)、広辞苑(新村出編著、岩波書店、第八刷、1989年)などに載っていた説明を参考に、よく使われる「同音異義語」を調べてみよう。

「じしょ」

【辞書】(「辞」は、言葉の意)言葉や文字をあ

る一定の観点から整理して排列し、その読み方、意味、用法などを解説した書物。※漢和辞書・国語辞書・英和辞書・人名辞書・辞書を引く

【字書】漢字を集めて一定の順序に並べ、その読み方、意義、用法などを解説した書物。※字典・字引とも。

【地所（じしょ、ぢしょ）】（家を建てる）地面。土地。※「ちしょ」とも読む。

【自処】自分で自分のことを処置すること。

【自書】自分で書くこと。自分で書いたもの。「投票用紙に自書するのは有権者本人でなければならない」などの使い方で、自分（本人）で書くことや書いたもの。

【自署】本人が自分でその氏名を記すこと。「署名」文字。※ゴム印や印刷、または第三者が書いた契約者本人の名前は「記名」である。

## 「じゅしょう」

【受章】（「受」は、もらう・うける意。「章」は、綾や模様のあるしるし、勲章）勲章や褒章、記念の記章などを受けとること。文化勲章や菊花・宝冠・旭日・瑞宝などの勲章、紅綬・緑綬・藍綬・紺綬・黄綬・紫綬などの褒章を受ける場合などに使う。対義語（反対の意味）は「授賞」。◆褒章受章者

【授章】（「授」は、あたえられる、さずかる意）勲章や褒章、記念の記章などをさずかること。対義語は「授賞」。

【受賞】（「賞」は、功：てがらのあつた者にあたえられるほうびの金品の意）賞をうけること。※賞状・賞金・賞杯・賞詞などを受けとる場合に用いる。

【授賞】賞をさずける、賞を授与すること。

※「じゅしょう」に際しての式典は、「授賞式」

であって、「受賞式」ではない。「章をさずける式」なのだ。しかし、「授賞祝賀会」などの場合は、「受章者」を中心とした会である時などに「受賞祝賀会」と書くこともある。

## 「せいさく」

【制作】（「制」は、ととのえる、ほどよくしたてる意）絵画・彫刻などの芸術品をつくること。タブロー。

◆卒業制作、共同制作、制作費、制作スタッフ。

【製作】（「製」は、つくる、物をこしらえる意）道具・機械・物品をつくること。類義語（意味が近い語）に「製造」がある。

◆製作所、部品を製作する。

※「制作」と「製作」には明確な区分がないが、「制作（create）」は主に芸術的作品を作る場合に、「製作（manufacture）」は主に実用的な物品を作る場合とに分けて用いられる。

## 「ちよっかん」

【直感】勘などの働きによって感覚的に物事の真相がわかること。ぴんとくること。

◆危険を直感する。

【直観】推理や判断などの間接的方法でなく、直接、対象の本質をとらえること。

◆真理を直観する。

※「直感」＝勘などの日常的な感覚に基づいている。「直観」＝対象の本質を見とおす心の働きをいう。

## 「てきかく」

【的確】「的（まと）」をはずれず確かなこと。まちがいのないこと。確実。正確。

◆的確な判断。意図を的確に伝える。

【適格】必要な資格や要件を満たしていること。

◆選手として適格だ。適格退職年金。

※「的確」と「適格」では、「的確」が本源的

で、「適格」は漢語にもなく、「適正確実」の意でのちに生じた用字法（誤用の定着）。一般には「的確」が使われる。的確な判断。

「ほしょう」

【保証】人物や物品について、それがまちがいないこと。不良品でないことを請け合うこと。また、請け合ったものに不都合が生じたとき、他に及ぼす損害の責任を引き受けること。

◆保証書・連帯保証・保証金。

【保障】障害のないように保つこと。責任をもって立場や権利・地位などが害を受けないように保護し、守ることを約束すること。

◆社会保障・安全保障条約。

【補償】損失を補って、つぐなうこと。特に、損害賠償として、財産や健康上の損失を金銭でつぐなうこと。

◆公害補償裁判・補償金

※責任を持ってくれるのが「保証」／脅威から守ってくれるのが「保障」／損害を埋め合わせてくれるのが「補償」

## ☆ 日本で作られた漢字

古代中国で生まれ、日本に伝えられた「漢字」は、——外来コード（中国から伝えられた漢字）を、自前モード（日本で作られた漢字＝国字）に編集する——日本人の優れた「造字」力によって、新しい命を吹き込まれた「国字」には、偏（へん）・冠（かんむり）と旁（つくり）の面白い組み合わせがある。

峠【たうげ＝上り坂の頂点、下り坂の始まり】、  
林【ふもと＝林（丘陵）の下（ふもと）】、辻（つじ＝道が交差する所）、畑【はたけ＝火＋田：焼き畑農業】、袷【かみしも＝上に着る肩衣と下に着ける袴】、襷【たすき＝和服の袖やたもとをた

くし挙げるための紐】、榊【さかき＝神の宿る木】がおもしろい。

また、几冠（かぜかんむり＝風の省略形）の国字である、凧【たこ＝風にはためく巾（ぬの）】、凧【こがらし＝木々を揺らす北風、木枯らし】、凧【なぎ＝風が止まった状態】もナルホド！

このほかにも、ナルホド国字がたくさんある。

雫（しづく）、佛（おもかげ）、嘶（はなし）、喰（く）らふ、劣（なた）、蕨（ごぎ）、笹（ささ）、糍（こうじ）、柝（とち）、栴（もみぢ）、柶（くぬぎ）、檉（かし）、楪（ゆづりは）、杣（そま）、柶（わく）、柶・柶（ます）、柶（まさき）、鉞（ブリキ）、鯨（むろあじ）、鮎（かじか）、鯨（このしろ）、鯨（かずのこ）、鮎（あわび）、鯨・鯨（そり）、鯨（いかだ）、糍（キロメートル）、糍（センチメートル）、糍（ミリメートル）、糍（キロリットル）、糍（デシリットル）、糍（ミリリットル）、呎（フィート）、噸・噸（トン）……など。

「国字」のわかりやすい解説が書かれている『日本語の再発見』（石井勲著、日本教文社、1988年）を読んでみよう。（※同書の記述は、旧仮名遣ひ、新字体）

我々が今用いてゐる漢字は、日本語を表すために、言はば改造したものであるから、中国で用ひられている漢字とは一応別の物である、と考へた方が間違いが少ない。我々が住んでゐるこの島国は、あらゆる点で、大陸の中国とは著しい違いがあるから、当然、物の見方、考へ方にも大きな違いがあり、それが言葉や文字にも影響してゐるからである。（中略）

さて、このやうな言葉や文字に違いがあるの

は、誰でも当然だと思ふが、物の名前の表した漢字でも、日本と中国とでは違ふものが多いのである。

“桜(さくら)”、“椿(つばき)”、“終(ひひらぎ)”、“榎(えのき)”、“柏(かしは)”、“楓(かへで)”、“桂(かつら)”、“楠(くすのき)”、“朴(ほほ)”、“檀(まゆみ)”などの漢字は、日本と中国とでは別物なのである。

“桜”は、中国には存在しない、日本の“さくら”を表すために、“桜”という漢字を借りて表したものである。“朴”は、日本では“ほほのき”の意味に使ふが、中国では“えのき”のことである。日本の“榎”という字は、中国では、日本の“きささげ”の木を表した字である。

“楓”は、“楓橋夜泊”の詩の“江楓の漁火”といふ言葉で親しまれてゐる“楓”だが、日本の“かへで”とは違った木である。翼の着いた実が成り、風に吹かれてこれが見事に飛ぶので“楓”と言ふ。

かういふ訳であるから、中国の漢字は中国の言葉を表した文字であり、日本の漢字は日本の言葉を表した文字であつて、同じ字形であつて、同じ発音をしてゐたとしても、別の文字である、と割り切って考へた方がよい、と思ふのである。

(『日本語の再発見』第五章「日本の文字」144  
～146ページ)

さきに【日本人の優れた「造字」力によって、新しい命を吹き込まれた国字たち】と書いたが、石井勲さんは中国産の「漢字」と日本産の「国字」をことさら区別せずに、広い意味での「漢字」ととらえる方がよいと述べている。

ちなみに、日本発の「カラオケ」を、中国では「卡拉OK」と作字(音写)。「上下から挟む」意の中国語「卡」は、外来語(※この場合は日

本語)の「カ/ka(r)音を音写する際に用いる漢字で、「ラ」は拉致の「拉」を、「オケ」には英語の「OK」を借字する、現代中国人のしたたかさ。

そういえば、インドの言葉で書かれた仏典を「漢訳(漢音写)」した訳教僧、鳩摩羅什や玄奘(三蔵法師)は、日本の万葉仮名(漢字の音を借りてやまとことばを文字で表した)のように、インドの言葉を漢字で表したものである。

日本で使はれてゐる漢字は、日本語を表はすために、日本人が改造したものだから、皆、日本で作った漢字である、と言ってもをかしくはない。しかし、今、ここで言はうとしてゐるのは、「日本で作り、日本だけで使われてゐる漢字」で、中国には無い漢字の事である。一般には“国字”と呼んで、中国で作られた“漢字”と区別してゐるけれども、私は、“国字”といふ言葉は、「日本の文字」といふ意味に使ふものだと思つてゐる。つまり、漢字とかなの総称である。

例へば、“鱈(さはら)”は中国で作られた漢字だが、“鯨(このしろ)”は日本で作られた文字である。だからと言って“鱈”を漢字だと言ひ、“鯨”は国字だと言って、両者を区別することにどれだけの意味があるのだらうか。私は意味が無いと思ふ。

だから、私は、漢字らしい形をした文字は、どこの誰が作らうと“漢字”と呼びたい。さうでないと、“漢字”という言葉がうっかり使へなくなつてしまふ。その証拠に、次の文字は中国産か、日本産か、当てて頂きたい。

①鯉(こひ) ②鯖(さば) ③鱒(たら) ④鰯(ぶり) ⑤鮫(あんかう) ⑥鰯(はたはた) ⑦鱈(どぜう) ⑧鱈(きす) ⑨鯨(しゃち) ⑩鱈(ふか)

中国産は①②④⑦⑩、あとは日本産の漢字で

ある。全部を中国産としても、全部を日本産としても五つは正答になる訳だが、五つ位しか正答が得られなかったのではないだろうか。

ただし、鮫鱈の「鮫」は中国産で、日本の山椒魚（さんせうを）のことを表した文字であるが、日本の「あんかう」という魚を表すのに、この字を仮借的に借り、これに「鱈」という字を作って、「鮫鱈」としたものである。これは、今は中国が逆に輸入して使っている。

かういふ訳であるから、ここに敢て、日本人が作った漢字を挙げる必要はないのであるが、日本人が作った漢字には、いかにも日本語の味わひ豊かなものが多いので、それを一つ二つ取り挙げたい。

「峠」。一見して「たうげ」と解る字である。山道を上りつめて、これから下りになる境目が「たうげ」である。これをこれ程見事に表現した字は、何万字といふ漢字の中にも見当らない。

「辻」。道が十字形になってある所を、国語では「つじ」と言ふ。今は「十字路」とか「交差点」とか、三字でこれを表してあるけれども、表現力は一字の「辻」に及ばない。

「俥」。「くるま」と読む事は「車」と同じだが、これは「人が引く「人力車」」の事である。今、タクシーを呼ぶのに「車を呼ぶ」といふが、そのやうに使ったものである。今はこれをタクシーの意味に使ふとよいと思ふ。

「働」。意外な事だが、この字は日本で作られた字である。漢字には、日本語の「はたらく」といふ言葉にぴったりの字が無かったので、その意味に最も近い「動」といふ字に「人」といふ字を加へて作ったものである。この字が作られると、直に、中国に逆輸入され、中国でも使はれるやうになった。この事は、日本人がどんなに「働く」といふ事に対する意識が強かつ

たか、といふ事を物語っているやうに思へて面白い。

これを、アナトール・フランス流に表現したら、「日本語の「働く」といふ言葉は、よその国の「働く」といふ言葉とは違ひます。だから、翻訳が出来ません。だって、どこの国の人も日本人のやうには働きませんもの」といふ事にならう。

（『日本語の再発見』第五章「日本の文字」147～149 ページ）

### ☆金木犀の名前の由来

秋になると黄金色の花をつけ、えもいわれぬ香りを漂わせる「金木犀（きんもくせい）」は、中国名を「桂花（クイフワー）」という。

中国のリキュールで桂花陳酒（けいかちんしゅ）といへば、金木犀の花を白ワインに三年間、じっくり漬け込んだフルーティなお酒（醸造酒）のこと。日本人の豊かな感性は、黄金（オレンジ）色の花の色を「金」色と見て、ザラザラした木の肌を動物の犀（さい）の肌になぞらえて「木犀」ととらえ、中国でいう「桂花」に「金木犀」という文字をあてたのである。

この「金木犀」の名前の由来については、原山が三十数年前、『わたしの健康』編集部の記者だった時代に、日本の薬史学、薬用植物学の泰斗・故伊沢一男先生（星薬科大学名誉教授）から直接うかがった、懐かしい思い出である。